

親子が向き合うきっかけをTACが創る

青森県 JA津軽みらい

団塊の世代が70代に突入していく二〇二七年。一刻も早い世代交代が求められるが、若い世代への事業承継は進んでいない。このままでは農業者がいなくなるという危機感を持ち、動き出したのがTAC（地域農業の担い手に向くJA担当者）だ。全国的な機運をつくろうと奮闘する彼らの取り組みを、全四回シリーズで紹介していく。

鈴木加寿彦 写真 Photo by Kazuhiko Suzuki JA全農TAC推進課 企画協力



青年部にも所属する和樹さん(左)。リンゴの出荷を担うため、担当のJA職員などとの人脈も構築できている



「高齢化、担い手不足と農家や農業関係者は言うけれど、対応は進んでいない。事業承継は親子間、家族間の問題でもあるので、どこまで踏み込んでいいのか悩ましかった」と話すのは、JA津軽みらいのTAC・久塚和さん。親子で向き合う時間の減少が、事業承継が進まない一因になっているケースも多いという。

そこで、JA全農が事業承継を推進するために作成したのが、『今すぐ始めよう！事業承継ブック』親子間の話し合いのきっかけに『だ。』「なから、どうやって取り組むの？」という農家の疑問に答えつつ、五つのSTEPごとに設けられたワークシートを記入すると、計画的に事業承継が行えるようになっていく。

親子の橋渡し役を担う

事業承継ブックの発行を機に、久塚さんは地域の農家に事業承継の提案を開始。まず声をかけたのが、リンゴと水稲を中心に栽培する高橋等さん(67)、和樹さん(40)親子だ。

「還暦を迎えた頃から意識していたが、息子と事業承継の話をしたことはない。TACが仲間に入って助かった」

こう話す等さんにたいし、「親父はおれの話は聞いてくれないが、TACの話なら耳を傾けてくれる」

と、和樹さんは言う。素直になれない親子の仲を、TACがうまく取り持っているようだ。だが、いきなりTACと親子の三者で話しても進展はしないと、久塚さんは話す。

「まずは等さんと、次に和樹さんと個人面談をしてから、三者で話そうにしています。等さんは和樹さんを本当は認めているのに、素直になれないから『まだ譲る気はない』と、個人面談のときは異なることを言うこともあるため、そこをフォ

ローし、スムーズに話し合いが進むようサポートします」

和樹さんは地元企業で働いたのち、二四歳で就農。営農技術や経営に関することも父から引き継ぎ、把握しつつある。

「事業承継ブックを機に、農業中も親父と話すことが多くなった。資産のことやパートを含めた労働力など、まだまだ把握できていない点が多いことも気づけた。今後はライフプランを考えつつ、税務や農地などの資産管理のことも、親父から受け継いでいきたい」

同JAでは、今年からTACと金融担当者がいっしょに担い手を訪問し始めた。営農技術だけでなく、信用や共済などに関する相談も増えており、部門間で連携し、対応する必要がでてきているからだ。

「TACはあくまで、担い手とJAをつなぐ役割。TACが起点となり、JAグループの縦(JA、県域、全国域)と横(TAC部門や信用・共済部門など)が連携できる仕組みを構築し、事業承継に取り組み体制を作りたいですね(久塚さん)」

事業承継の主体は息子世代！



イラストは、JA全農TAC推進課と地上編集部によるコラボキャラクター「TACマン」

JA津軽みらい

青森県の西南部に位置し、リンゴとニンニクの生産が盛んに行われる。水稲では、2016年の米の食味ランキングで特Aを取得した『青天の霹靂』の作付け面積を増加中。現在は、3人のTACが月に約300人の担い手を訪問している。

ポリシーブックで青年部全体のアクションに

青年部では、今年度JA版ポリシーブックを作成することが決まった。県農協青年部協議会の委員長を務める川口貴生さんは「JAだけではなく県全体でも、ポリシーブック作成に取り組み、後継者対策の柱として事業承継を明記していきたい。部員も将来のことを意識することで、経営者としての意識が芽生え、ひいては青年部活動にも主体的に参加するようになるはず。青年部全体の取り組みとしても進めていきたい」と話す。



事業承継ブックで経営者の自覚を芽生えさせる

青年部の事務局も担う久塚さんは、事業承継ブックを活用した研修会を開催した。「今まで意識していなかったけど、そろそろ考えないと」「ワークシートに記入していくことで、親との話し合いが不十分だと気づいた」といった声が聞かれた。その後、「税務のことをもっと知りたい」などの相談が寄せられ、次期経営者としての自覚を持つきっかけになったという。



JA全農のHPで事業承継ブックを公開中!

